特別研修

月例研究会　議事録（　10　月）

2010 年度第　5　回

報告題名　農業サポーター事業における参加者の意向と課題 -仙台市の農業サポーター事業を事例に-	
報告者　渡邊　みどり	**日時 10 月 14 日　午後 3 時～**
（所属分野）　農業経営経済学分野	**場所　第 2 講義室**
座長　福田	**議事録担当者　宮本**

出席者

長谷部、木谷、安江、両角、米倉、冬木、伊藤、石井、菅井、水澤、佐藤、韓、大友、スチン、八木、宮本、神浦、佐々木（龍）、福田、宮里、渡邊、山口、林、王、北村、堀、滝田、威、易、中村、泉井、金、覃、小原、片山、佐々木（彩）、佐藤（良）、澤田、渋谷、千葉、藤

報告要旨

近年，食など農業への関心の高まりや，ボランティアなど社会貢献活動への活発化などから，農作業を手伝うボランティア(以下，援農ボランティア)に対する注目が高まっている．農林水産省が行った都市住民の農業・農村への関わり方についての意識調査(農林水産省「食品及び農業・農村に関する意識・意向調査」)で，20.2%が「援農ボランティア等，農村に出向いて農業・農村を応援したい」と多様な農業への関わり方に対して高い関心を示している．

また農家側にとっても、援農ボランティアは農業労働力のひとつとして有効であることから，農村の高齢化や農業労働力不足などの問題の解消に効果があると考えられている(八木洋憲・村上晶弘『都市農業経営に援農ボランティアが与える効果の解明-多品目野菜直売経営を対象として-』)．また，ボランティアが農村地域に入ることで地域の活性化など二次的効果が期待されることから，今後さらに双方のニーズが高まることが予想される．

しかしその一方で,援農システムを持つ市町村は全国で 104 件に留まっており(渡辺啓巳・八木洋憲『援農システムの実態調査と援農支援ネットワークシステム』)，今後地域農業の支援者であり理解者を，援農を通じて増やしてゆくことが，都市近郊地域をはじめとして農業に求められている．また，これまで農家側の視点に立った研究は行われていたが，実際にどのような市民が興味を持って援農活動を行うのかについては明らかにされてこなかった．

本研究では，宮城県仙台市の農業サポーター事業への参加者に対するアンケート調査や事業主体である仙台市への聞き取り等を通じて援農ボランティア像を明らかにすると共に，農家だけでなくサポーターにとってもインセンティブの強い事業のあり方について検討する．

質疑・応答

木谷：まとめで「サポーターが同じ環境で活動できるような仕組みづくりが必要」とあるが「同じ環境」とはどういう意味か？

渡邊：地区による事業利用条件の違い。登録農家は若林、太白区で多くサポーターの活動機会に恵まれている。一方、サポーターが多いのは青葉区、泉区で、活動機会が少ない。区によって利用条件が均等になればいいと考えている。

木谷：なぜ地区ごとに差があってはいけないのか？

渡邊：活動意欲やふれあいの機会を増やしたいという意欲を持て余してしまっている状況。農家との繋がりがある方が活動機会を得やすいが、事業開始当初からやっている人では農家との繋がりがあるのに対し、新規登録する農家が少ないので新しくサポーターになった人は農家との繋がりを持ちにくく活動機会が限られる傾向がある。年齢などにより差が出ない事が必要だと考えている。

安江：サポーターのニーズはよく分かるが、農家にとって経営面でインパクトがあるのか触れられていない。例えば、農家はサポーターを低賃金の労働力として使いプラスアルファで交流できれば良いと考えているのかなど、その辺が分からない。農家の意見が分からないため、サポーター側からの一方的なニーズしか評価できないが、両者にとってのニーズを活かす仕組みとしてどのようなものを考えているのか？

渡邊：農家の意見では今のシステムは利用しにくいとのこと。シルバー人材センターの方が評価は高い。具体的には、台帳への登録を不要にするのが一点。基礎知識、もう少し高い農作業技術を有することが求められており、講習会の実施などを行う事がもう一点。

冬木：アンケートで志望調査と郵送調査とサンプル数が同じなのは偶然？

冬木：ＮＰＯの法人化よりも運営の専従者がいるか否かの方が重要なのではないか。研修事業を仙台市から受け継ぐ際に事務局をそのまま仙台市が担うといった仕組みはどうか。

冬木：地域差による事業利用条件の違いに触れていたが、サポーター側の事情だけではなく、農家の側の事情も分かったらいいなと思う。

長谷部：なぜサポーター事業に限定するのか？労働の需給関係問題として扱ってもいいと思うのだが。

渡邊：日本農業には担い手が必要。サポーターは農村に入り主体的にというのではなく、住居から通いで農業に関わることで担い手とまではいかずとも地域農業を支える役割があるのではないかと考えている。また、参加者が農業に関わる事で付随的なメリットがあるのではないかと考えているため。

長谷部：「支える」という点が問題なのか？片手間に手伝うというのが重要なのか？そこが重要だという理論があるのかもしれないが、そこがわからないから頓珍漢な質問に。

冬木：１－２のグラフからは、多様なかかわりへの関心が高いとは言えない。環境保全農産物のアンケートでは安全な食品を取り入れたいというのが一番に来て環境項目はずっと下に来るが、なぜならそれが一番楽だから。直接体を動かさなくてもいいので。それと同じで多様な関心はない、という方が妥当。

冬木：高齢化について。2010 年センサスは劇的に傾向が変わっているという話なので修論終えるまでにそちらのデータに更新してはどうか。

冬木：150 日以上働いている人は、統計の定義上、期間的農業従事者になるのでは？ボランティアとは違う質になっているのではないか。